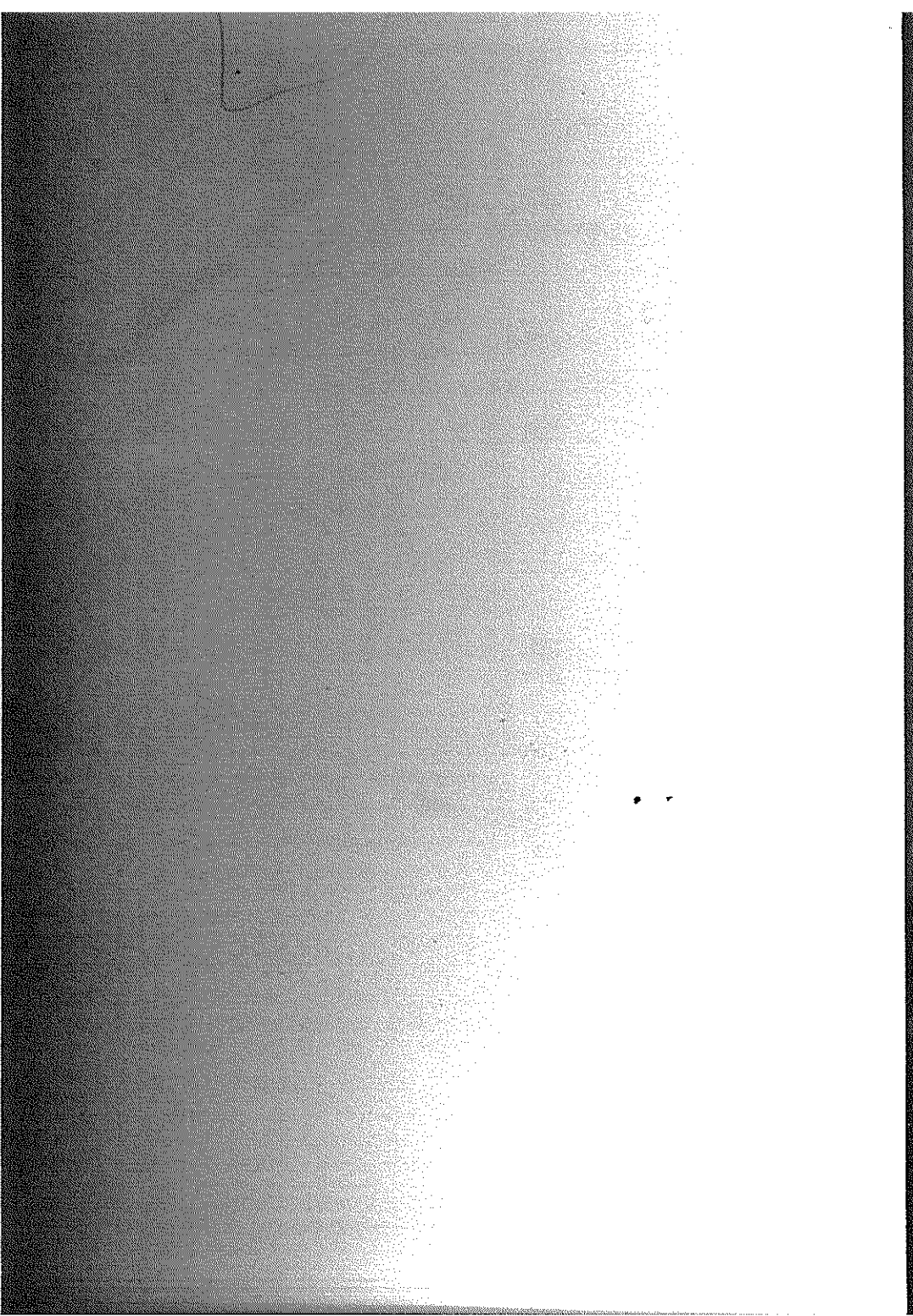
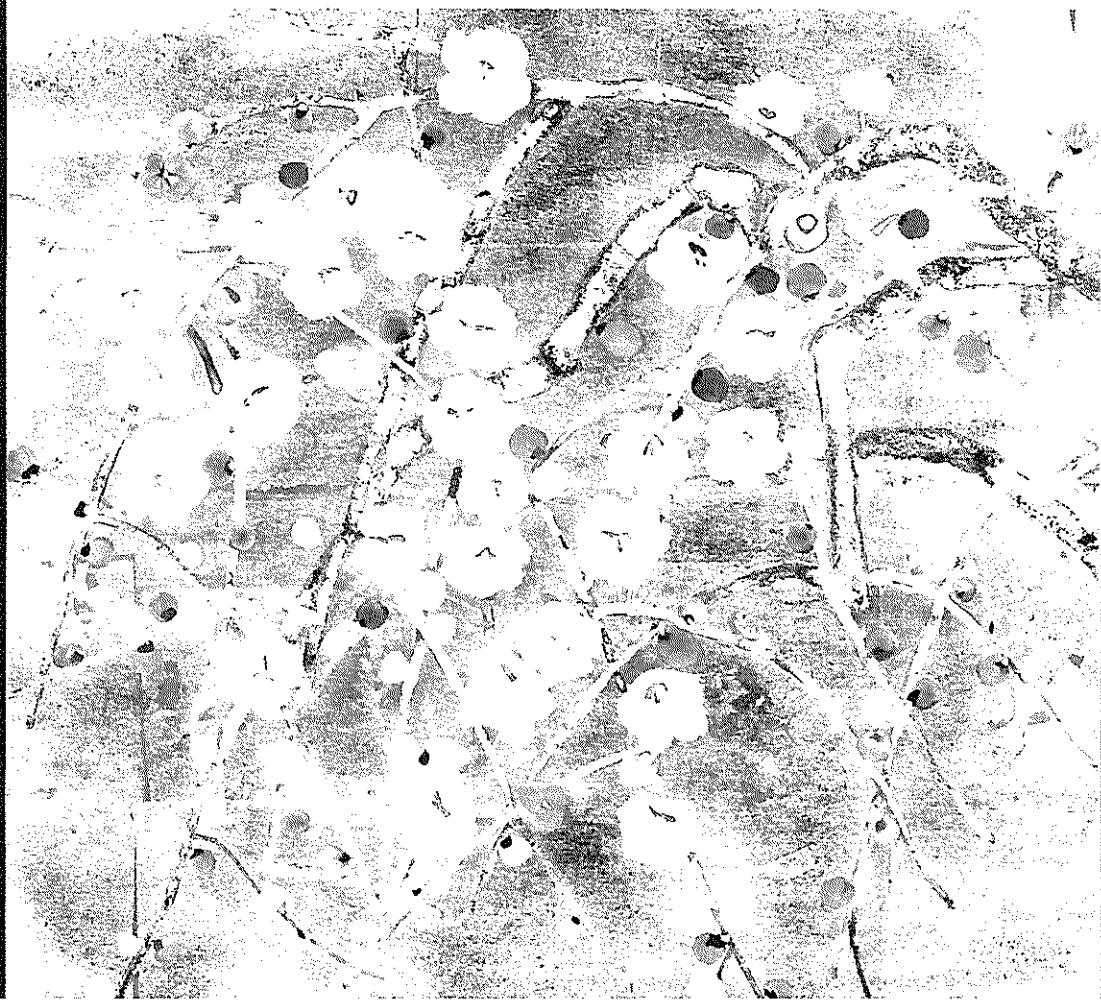


文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三十年三月一日発行毎月一回一日発行
第九十六巻第三号二月十日発行

芥川賞発表受賞作二作全文掲載95th
石井遊佳 若竹千佐子 文藝春秋

総力特集 日本の教育を建て直せ/南北統一五輪は欺瞞だ 三月特別号



將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之

歴史学者・
東京大学名誉教授

新連載

「第三回」勝敗は兵家の常か

家康の「天下取りの大局観」を形作ったのは、関ヶ原における冷酷な政治リアリズムだった



(上) 遂に南宮山を下りなかった毛利秀元
(下) 家康が奪取した桃記山の現在

(アフロ)

一、徳川家康と毛利輝元の器量比べ

「何しろ、権現さまに敵ふものがありやしない。天下の経綸などと云ふことは、権現さま一人ですものサ。外に、何も相談する必要がない。夫で、極正直な手堅い人斗を用いたものだ。本多佐渡が、僅かに多少、相談に預かったようであるが、アレはサギ師だから、ホンノ僅かの事を言ふた丈サ。よく歴史を御覧な。誰が家康に考を申出たものがあるエ。あらしまい。信長などは、夫と変て、才子を用いた。夫で、末路がアゝさ。権現さまなどは、才子は入りはしない。何でも、自分一人で考へるよ」

ここで本多佐渡守正信を「サギ師」と呼んだのは、明治三十年の勝海舟である（『増補海舟座談』）。

勝らしいハツタリはともかく、徳川家康が独立独歩の思索と判断で関ヶ原合戦ははじめ天下の大事を乗り切ったのは事実である。家康は重要案件を他人と相談する場合でも、大局観を補強するためであり、大事の決断は自分で下したのだ。この点が毛利輝元はじめ家康に屈従した大名と違う点である。しかし毛利にも人がいないわけではなかった。「この幼き人の、父元就に似たまひし事の怪しさよ、如何さま只人にてはおはすべからず、輝元いま

だ世嗣なし、毛利の家つぐべき人、此の人にや侍らん」

してきた国を必ず失い、身も危うくなるだろう」（『名将言行録』一）。

『藩翰譜』は後世の史料ながら、六代將軍家宣の侍講の新井白石は、毛利元就の子小早川隆景が幼き日の毛利秀元を讚美したと書いている。家康の子でいえば二代將軍秀忠と同じ天正七（一五七九）年の生まれである。

隆景は、五、六歳の頃から秀元を高く評価し、吉川元春（広家の父）も隆景に同意した。二人は子のいない惣領の輝元に推薦し、秀元は本家の養嗣子に入ったのである。年齢は秀元が従兄弟とはいえ輝元より二十六歳も下なのだ。秀忠は、十四歳での朝鮮出兵以来の武功や防長二州の統治経験を誇る秀元を高く評価し、「御咄衆」として三代將軍家光の身辺近く侍らせたものだ（松浦静山『甲子夜話』5、巻六十九の一）。

他方、隆景は輝元についても印象的な評価を残した。かりそめに口語にまとめてみる。

「たとえ天下が乱れても、輝元は出過ぎることなく、戦争に関与してはならない。ひたすら己の領国を堅く守って国を失わないように計略を立てるべきだ。何故なら、輝元は天下を平定する器量をもっていないからだ。もし身の程もわきまえずに、しゃしゃり出て天下兵乱のはかりごとに参画し、領外に野心をもつなら、これまで維持

隆景の遺言は、あまりにも的確に甥の力不足を見抜き、関ヶ原の不始末を予測していたかのようだ。「国を欲張るなら、すぐに滅ぶぞ」という隆景の戒めも伝わっている（『常山紀談』中、巻之十六）。輝元の祖父元就は、当分五か国、十か国を手に入れるなら幸運というべきであり、子孫らは天下を「競望」してはならないと遺訓を残していた（『吉川広家自筆覚書案』『吉川家文書之二』九一七）。輝元には、家康との力の優劣を冷静に評価し、領国保全と局外武装中立の維持を図る能力が乏しかった。ギリシア人歴史家のプルタルコスは、自己愛も過ぎると、自分への最良目のために、万事を欲するだけでなく、自分が万事を備えていると思ひこむと警告していた。欲するだけなら異常でないにせよ、自分に能力があると思ひこむのは危険であり、大いに警戒が必要なのだ、と。この警句は、さながら関ヶ原に向けた輝元の政治選択にも当てはまりそうである（『似て非なる友について』『モラリア』1）。

関ヶ原合戦の大きな謎は、何故に秀元が南宮山で戦況を観望したままに終わったのかという点だろう。関ヶ原で家康が勝利を取めた主な要因は、小早川秀秋の裏切り、吉川広家の内通、毛利秀元の不戦の三つであった。